

# 地域研究の方法と現代中国研究

早稲田大学 天見慧

# 地域研究の意義と方法

\* Discipline重視の学問的風潮→Inter(Multi)disciplinaryな地域研究の衰退

## \* 問1、Disciplineだけで中国の適切な分析ができるのか？

Q 1 <全体主義→権威主義→民主主義>の体制移行論は当てはまるのか

「中国共産党はソ連や東欧の共産党のようになぜ崩壊しないのか」

「蘇東波は中国にも襲ってくるか」の論議⇒来なかった

\* よく言われた説明：独裁者の反撃、民主主義的土壌の未成熟など

\* 天児の解釈：中国での共産主義とナショナリズムの癒着（東欧との比較）

共産主義と農村・農民意識との結合

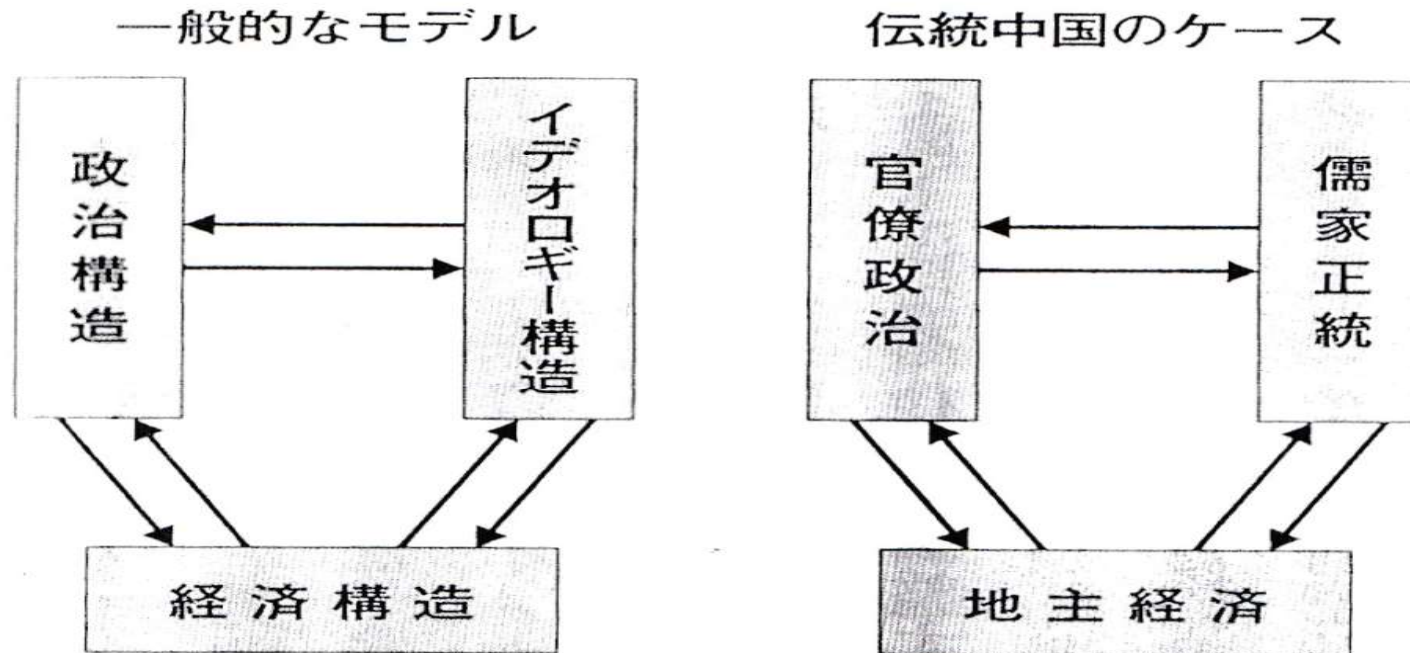
\* 天安門事件の時のMikel Oxsenberg の発言

「我々中国研究者は天安門事件を生み出した中国の底流に流れる本質的な部分を見抜けなかった」

## 第2の問い: 2000年余り続いた中国封建社会論争

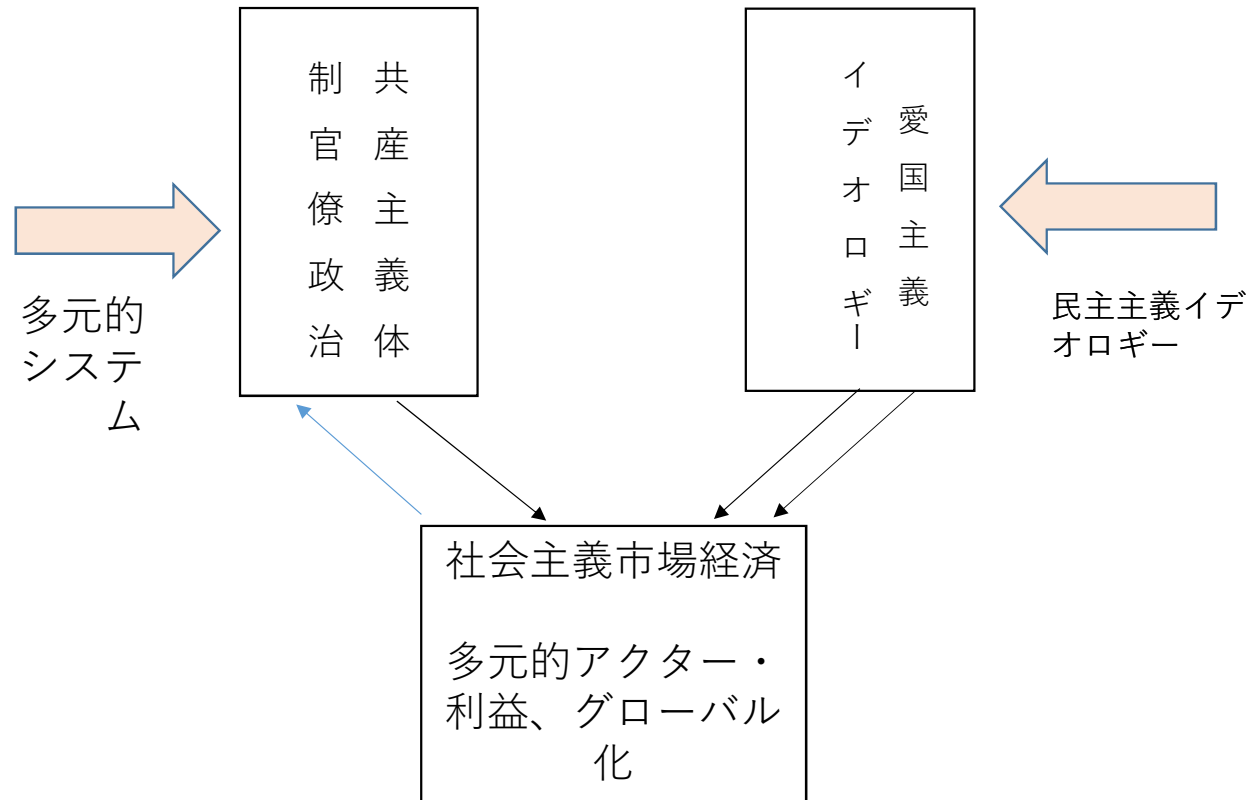
金観濤の分析枠組みの試み⇒「変わりにくい構造」の提起

図5-1 社会構造のサブ・システム



(出所) 金観濤・劉青峰『中国社会の超安定システム——「大一統」のメカニズム』より引用

# 中国安定システムの行方



# 第3の問い：中国が抱えている問題と未来像の説明

## 新ステージに入った大国中国とその緊張関係

- (1) 「新常態戦略と持続的成長＝和諧社会か、成長優先か  
⇒ 和諧しつつ成長は可能？」
- (2) 「国家・社会の構造的緊張＝一党体制の堅持か、多元的社会の受容か  
⇒ 多元的社会を包み込む一党体制は可能？」
- (3) 「国際戦略・安全保障」＝大国主義外交か、多国間協調主義か  
⇒ 中国イニシアティブの多国間協調をめざす  
＝毛沢東「三つの世界論」中国主導の国際秩序構想

# 習近平の国家戦略の発想；2つの百年の成功の実現

- ①近代史以前**栄光の歴史**＋近代史での**凋落、列強の侵略からの屈辱の歴史**
- ②あらためて**世界の中心を目指す**強い志向力→**勢力圏の拡大の意図**
- ③一層の発展＝**資源、エネルギーの確保、技術・資金の増大**
  - ⇒習近平はこのような対外戦略を推進しようとする典型的な人
  - \* **「大中華圏」の形成** ≠ 東アジア共同体
    - ⇒中国の強い影響下での政治・経済・文化共同体の構想⇒中国・香港・台湾＋華人の多い東南アジア諸国＋世界の華人勢力＋韓国・日本？
    - それに加えて、イニシアチブを握れる**海域・空域**＝第2列島線内域
  - \* この問題＝**アジア太平洋パワーバランスの変更に関わる**
    - ⇒**中国は既に米国と「戦略対話」開始**⇒長期的な係争問題
- ④**一帯一路、AIIBの推進**→中国以西での「**共同体**」構築
  - ⇒「**人類運命共同体**」の構築

**従来の近代化論、マルクス主義論からは出てこないロジックによる展望**

# 地域研究としての中国研究の必要性

\* 地域研究の「こだわり」 = 地域の個性的な特徴、その構造を解明

\* そのための方法論、分析枠組みを構想すべきである

(1) 「中国のようにどこからみても特殊な経済が世界第一位の規模に成長していくとすれば、各国の経済を理解するうえでその国の固有の歴史や特徴に目を向ける必要がある」 (丸川和雄『現代中国経済』)

(2) 本書は、歴史的視点、比較の視点、グローバルな視点から中国の経済システムの独自性を分析し、「制度に埋め込まれた曖昧さ」が高度成長の要因の一つであると主張している (加藤弘之『「曖昧な制度」としての中国型資本主義』)

(3) 「関係—圈子—差序格局」 「多元—一体格局」 (費孝通)

# 一般ディシプリンと地域研究アプローチの融合

- (1) まずは政治学、経済学、社会学、歴史学のディシプリンから、それぞれの分野での特徴的な社会現象を分析、説明を試みる。
- (2) しかし、これらのディシプリンでは説明しきれない現象、特性が残る。  
変わりにくいキーになりうる概念を抽出し、その特徴を明らかにする。  
例) 政治学：権力、秩序、民衆、大一統  
経済学：包、大衆資本主義  
社会学：関係、圈子 都市・農村（戸籍など）
- (3) それらの概念の「束」を地域研究アプローチの分析枠組みとする
- (4) 一般的なディシプリンと地域研究アプローチの融合



# 分析枠組みとしての「基底構造」論： ⇒必ずしも上述のアプローチから導き出したものではない

## 1. 基底構造とは：

「地域的独自性」を生み出す多様な要素の中で「変わりにくい」—「変わらない」ではない—重要な要素の束、およびそれらの関係性の束を基底構造と定義。  
個々の地域のリアリティを理解する基盤、分析枠組みになる

## 2. 基底構造の主な構成要素(これ以外にもありうる)：

- ①個々の国の地政学的・人口的特性の社会的意味、
- ②長期にわたり蓄積された文化・歴史意識、
- ③人間関係（自然との関係含む）、特に変わりにくい社会構造

## 3. 事例：日本の「基底構造」

(1)島国で内向型交流活発→「共同体」空間形成。

為政者の強権的支配や官僚制支配による秩序維持ではなく、相対的に共同体の自治的秩序強い。平等な人間関係があり、庶民にも教育、医療を受ける機会平等

(2)自然観から調和を好み劇的な変化を好まず、家系的血統主義的な民族観念が強い

(3)対外的には安全保障意識は弱い、外敵を意識すれば強い「集団主義」を発揮

# 中国の基底構造 I (四つの大規模性)

## (1)領土の大規模性

秦の統一後中華帝国形成、清朝期ほぼ現在の規模に領土拡大。現在 960万平方キロ、世界陸地の 1 / 15、ロシア、カナダに次いで世界第3位

## (2)人口の大規模性

歴代王朝約5000万人を上下に推移。1711清の康熙帝時代から1億人超え(ほぼ同時期の世界総人口約6億6000万人－国連などの推計)。以後50年毎に1億人前後のペースで増加。現在 1.3億で世界1位

## (3)思想の大規模性 大一統：

一つにまとまることをよしとする考え方＋自己を世界の中心に位置づけ、円錐形のように広がるヒエラルキーをよしとする考え方

## (4)権力の大規模性

権力が広い意味で社会に対して圧倒的な力をもつ＝歴代の王朝時代。中央には六部と呼ばれる官僚機構プラス軍・監察の機構がある。地方の長官の任命権や「回避制度」などによって地方をコントロールする仕組みがあり、強固な権威的ヒエラルキーが歴史的に維持

# 中国の基底構造 II (四つの断層性)

## (1) 幹部と民衆の断層性

伝統的な士大夫と老百姓の区分、「先知先覚、後知後覚」論、共産党エリート主義  
民衆が指導者を選ぶ、指導者になるメカニズムはない

## (2) 関係(guan xi)と制度の断層性

近代化がRule of Law, 制度化促進 (S.P Huntington)、中国では容易にそうならない  
Guan xiがしばしばルール、法、制度以上に重要。圈子の下に制度を考える

## (3) 都市と農村の断層性

伝統的な都市と農村の断層、社会主義社会下での戸籍制度の存在と維持  
経済発展の中でも新たな2重の都市—農村関係(孫立平、陸学芸)

## (4) 政治と経済の断層性

本来みられる経済と政治の相互浸透性、相互作用性が極めて弱い  
しばしば政治のロジックが経済に介入 = 政治優先社会、鄧小平は経済と政治を分断

# 基底構造論を軸とした包括的中国研究構想

基底構造の特徴を選択的にあるいは包括的に取り込みながら、同時に特定分野のDisciplineを結び付けて課題の解明を行う

